小説「足払い」（下）

外狩（とがり）　雅巳（まさみ）

四

左足を対手の腹の下あたりに当てて、後ろへ倒れていく。のしかかってくるその男の勢いを利用して後転していく。その時対手の衿を握った両手は強く手元へ引く。足は真直ぐに伸ばす。足裏へ対手を乗せたらもう「巴投げ」は決まったも同然だ。

そんな相馬のもくろみは見事にはずれて股の中へ入り込んでのしかかられ、いま「上四方固め」におさえ込まれる寸前だ。負ける。頭の中に敗北の二文字が浮き上がってくる。

するとまたあの一回戦で相馬に負けたあの男の後ろ姿が思い出されてきた。敗れて背を丸めて退場していくその沈んだ後ろ姿。そして声援に来ている自社の幹部達の前でひっきりなしに頭を下げている。社を代表して来たあの男にもう陽の当たる機会は無いかもしれなく、自分自身のためにだけ闘い勝ち抜いていきたいと強く思っていた。いま相馬には柔道しかない。

手で頭をかばって体を丸めてまるで穴にこもったような形でただひたすら攻撃から逃れようとする。芋虫のように身をくねらせて場外との境目のそのラインを越えようと必死に逃げ回る。

京子の目に今の自分がどう映るのか。それだからこそ今ここで敗れたくはなかった。再度の反撃で男らしい闘いを見せたい。すでに社を代表する二人の選手のうち一人として伊藤は三回戦を苦もなくクリアしている。今年こそ伊藤の優勝の可能性は大きいとあるスポーツ紙は報じている。

「そしたら私はあの人と一緒になるの。でも……」

京子のあの言葉がよみがえってくる。でも……の次に何が言いたいのだ。

一ヶ月前、京子が販売部の窓から見た相馬の姿。夕陽を背に受けて北風に追われるようなその姿。受注締切り午後四時を目前に販売部内は今日もまた戦場になっていた。

ダークスーツに身を固めた戦士達が目標に向かって飽くなき挑戦を繰り広げる。実績表が壁から見下ろしている。

その前に仁王立ちになって声を荒げて督戦するそのダブルが似合う切り込み

隊長こそ課長の内辞を発令されている伊藤その人である。次代の販売部そして明日のN工業本社を背負っていく男。
そして窓外には、北風の中ただ一人丸めた背に重そうな荷をかつぐ相馬。流通管理部万年平社員。
それでも京子は相馬についてきた。浅黒く陽焼けした笑顔の中でまっ白い歯のまぶしさと汗の臭いの中で立ちくらんだ青春の一ページ。その日以来の誠実な青年との日々。相馬といる時間こそ自分の人間を感じる時だと信じて来た日々。
伊藤は強引だった。それしかない男だった。自分しか京子を幸せにできないと信じ込む男だった。
自信と突進で目標を極め続けて来た男。その男が目に涙して跪ずいて愛を告白した時から京子は揺れてきた。親達の願う貧しさのない平穏な家庭。いくつかの恋の遍歴の中で知った男達の仕打ち。打算が頭をもたげる女の二十八歳。

五

外で一台のトラックがいま枕元に響く音を残して行き過ぎた。すぐ後でまた次の音がせり上がってくる。ブロロオと次第に高くなり耳元すれすれに接近して部屋とダブルベッドの上の二人をゆすぶり上げて、その音が消えた後の静寂の中で男と女の裸身がうごめいている。
駅裏を降りると北風が正面から襲いかかってくる。コートの襟を立て肩を寄せ合って左に曲がって迷路のような飲食店街の露地をさまよい始めると、今日もまた二人の貪欲な貪り合いの時間がやってきた。
手垢で黒光りするテーブルといびつな丸椅子しかない小さな店内にあふれる作業服姿の男だらけの中で次々に飲み干す安くて強い酒が、二軒目そして三軒目と体中から理性と知性と希望の三つを麻痺させてゆくまで、さらに獣の内臓のゴッタ煮を売る店の奥や、いぎたなく酔いつぶれて床に転がるボロ布のような男達のいる店へと二人は飲み継いでいく。気がつくと今日もまた二人はその宿のベッドの上にお互いをさらけ出していた。
川を渡った第三京浜国道が大きくカーブを切って窓の外ピッタリに走っている。去来する車のエンジンのうなりの中で京子の発する絶叫もまたかき消されていく。
頭を振り立てて口の端から漏れるその叫びを見下ろす相馬の目にバッサリと結びを解かれて乱れ広がった長い髪の黒さが純白のシーツの上で蛇のようにうねり波打ち、汗でギラギラとした京子の顔の美しさを女神のように際立たせる。大きくせり上がって乗っかかっている相馬の身体ごと持ち上げて反り返る白い腹から背に回した腕に相馬の力が加わる。〝クソウ。胎ませてやる〟百キロの巨体を押え込む時よりも強く相馬は京子を組み敷いていく。

〝やめて〟男の昇りゆく気配を感じて京子の口から拒否の言葉が出るとビクウンとさらにひとつ大きく反り返り振り立てて相馬をはねつけようとするその上でいま、男の激情が達しようとしている。頭いっぱいに広がった快感のその中心から一気にほとばしり出る激流の波の中で京子の裸身が紅を刷いたように染まっていく。

頂点の満足感が長く続いてその後に続く空白の時の流れが終わった時の二人の目と目が刺し合っていた。

「明日の決勝戦には来ないでくれ。伊藤とやるんだ」

「いや。行くわよ」

「俺がまたあいつの下で打ちひしがれるところを見たいのか」

「そうよ。そこが見たいの、ぶざまなあなたが」

六

高い視点から見下ろして薄くなり出した頭の上へ鼻からの空気をふりまきながらつかみかかって来る伊藤の組み手を切り返し切り返し相馬は広い場内を後退する。腰を大きく引いて一歩また一歩と後ずさりしていく。

社内での練習でもいつもそうだった。無理矢理つかみ込んで来て腰に乗せる、投げる、そしてのしかぶさってくる。もう何度相馬はそうやって伊藤の胸の下でそのワキガの臭いを吸い込まされてきたことだろう。今日はその総仕上げだ。京子の目の前で決定的に踏みにじられてゆく。その先に伊藤と京子の結婚があるのだろう。

相馬を切り捨てられない京子の心のほんのわずかな部分。そこだけで繋がって来た四年間。昨日の夜の言葉が相馬の頭に蘇ってくる。俺はここでぶざまに負けるべきなのだ。そうすれば本当に自分とのしがらみを切って京子はこの男の胸へ飛び込んでいけるのだろう。

相馬は顔を歪めてねじくれた心の苦しさに耐えようとする。何だったのか自分は。今あの高いスタンドから、この腰を引いてヨタヨタと逃げ回っている頭髪も薄くなり出したみじめな中年入口のこの俺を、どんな気持ちで見下ろしているのだろう。相馬にはそんな終わり方での青年時代のピリオドは耐え切れないことだった。

引きずり上げられて腰にもっていかれる。渾身の力で耐える。耐え続けるだけだ。十分間の競技時間いっぱいまで、とにかく耐える以外に方法がない。襟首をわしづかみにされて広い試合場の畳の上を右に左に前にうしろに引き回されていく。このあと伊藤の左足が畳を摺って飛び込んでくるのだ。

いつもそうだった。高い位置で半回転させられて、回ったところで一時静止されてそのまま約百センチメートル下の畳めがけて体重を乗せてたたき落とされるのだ。五体が分散しそうな着地のショックの中で決定的な敗北を味わわさ

れてきたのだ。今またその瞬間がやってきたのだ。
絶望感の中で最後のひとあがき、体をゆすって組み手をふりほどく努力をする相馬。そののけぞった顔の視線の先が見つけたあの水色のワンピース。京子の顔がクローズアップで接近する。ひややかな視線と交叉した時相馬は本当に狂った。頭の芯から怒りが沸き上がってきて身体中に広がってゆき、いっぱいになって爆発した。
大きく持ち上げられて伊藤の腰の上を回転する寸前の相馬の右足が伊藤の軸足の前を通り過ぎようとしたその時、くの字に曲がっていた相馬の足が突然ピーンと直線に伸ばされた。そして伸び切った足の先が伊藤の膝の前に引っかかった。絶対禁止の動作を行なった相馬だった。
こうしてからまった足は、駆けていく両足の中に棒を差し入れると転倒する時と同じ状態になっている。もつれ転倒する伊藤。どちらかの足が折れる結果となる。
引きずり回され、つまみ上げられて京子の目の前で負け犬としてたたきつけられようとしていた、その土壇場で相馬の足が引っかかった。その時はじめて京子には相馬が見えたような気がする。あのまぶしかった白い歯並びの日から長い四年目。いつも京子には相馬がはっきりと見えなかった。おぼろげながら貧相を正視出来ず酒に理性が溶け切った中でしか正対しえなかった四年間。
それが決定的な破滅を迎えようとしている今、はじめて相馬の全身がはっきりと見えたようだ。人生丸ごと足払いされた一人の男のそのおしまいの姿。
もつれて一体となって倒れていく二人。足が折れた音が聞こえたようだ。見つめ続ける相馬。迎えてはじき返す京子の視線。刺し合った二つの視線のままで時間は止まった。

（完）